

盤双六

日本で千年遊び継がれた伝統ゲームが、今よみがえる！

和風バツクギヤモンに親しもう！

歴史

盤双六は、飛鳥時代かそれ以前に日本に伝わり、明治時代まで遊ばれたバックギャモンです。

江戸時代中期までは「すごろく」と言えば盤双六のことだったのですが、江戸時代後半に盛んになつた絵

双六と区別するために、ここでは「盤双六」と呼びます。ほかにも、古制双六とか、本双六、古局双六、雙六、雙陸などの呼び方・書き方もあります。

盤双六は千五百年の歴史があるので、伝来のものではあります、困暮と並んで由緒ある日本の伝統ゲームと言えます。実際、奈良の正倉院には聖武天皇が遊ばれたと伝えられる、美しい紫檀木画双六局ほか6面もの双六盤が伝世しています。それを見ても分かるように、用具は千五百年間ほぼ不変でしたが、ルールの方は変化があります。ルールは形がないので、正確な再現は難しいのですが、現在の研究ではおおよそ次のような変遷であったと考えられています。（ただし一般によく用いられる時代区分とは若干のズレがあります。）

古代ルール → 中世ルール

↓ 近世ルール → 近代ルール

それがどのようなものであつたかは、ルールを説明するときにつれます。聖武天皇や清少納言、紫式部や兼好法師らは古代ルール、織田信長や豊臣秀吉らは中世ルール、太田蜀山人や平賀源内は近世ルール、森鷗外らは近

代ルールで遊んでいたと想像されます。面白いことに戦国末期にポルトガル人が持参したバックギャモンは、そちらも近代ルールへの変遷以前だったので、日本の盤双六プレーヤーと違和感なく遊べたようです。

さて、盤双六は古来「賭け事」と

して遊ばれ、持統天皇以来、何度も禁令が出されています。それにもかかわらずと言うべきか、それだからと言ふべきか、中世には「猖獗を極める」と言われるほど、身分・性別を越えて流行しました。パンデミック並みに流行ったということで、多くの屏風絵や錦絵にその証拠が残されています。史料には双六の勝負が元で刃傷に及んだ話や、田畠を失った話などが記録されています。しかし十八世紀末ごろにルールの混亂があつたためか、生産力の向上とともに遊びが多様化したためか、カードゲームやダイスゲームにギャンブルの王座を奪われ、それ以降はむしろ女性の室内遊びとして定着していきます。江戸時代後半の富裕層の嫁入り道具には「三面」と称して、碁盤・将棋盤・双六盤（または貝桶）が用いられたほどです。

えてきた尼寺の伝承も絶えて、昭和時代にはすっかり滅亡してしまいました。それとは直接かわりなく、昭和時代後期には三たびバックギャモンが招来され、現在に至っているのです。

▼南蛮屏風（伝 狩野山樂 十七世紀 サントリー美術館所蔵 重要文化財）

室町時代末期の南蛮貿易を描いたものです。ポルトガルよりやってきた南蛮船の艤装で、ポルトガル人が盤双六を打っています。当時、バックギャモンと盤双六はともに中世ルールだったので、国を越えて遊ぶことができ、絵師もよく理解できます。



ルール

ここにはバックギャモンのルールを知っています。それを前提に、それとの違いのみを記します。

そもそもバックギャモンと盤双六のルールの違いは五点しかありません。

まず第一にオープニングロールが違います。盤双六では予め先手・後手を決め、先手が2個のダイスを振ってその目で進めてゲームを始めます。バックギャモンのローカルルールにもこうした始め方をするものがあります。なお盤双六の2ゲーム目は先手を交代したと見られます。

第二に、ぞろ目は4回でなく、2回のみ動かします。これも十七世紀ころまではバックギャモンもそうだったといふ説があります。「南蛮人」と違和感なくゲームができた由縁です。

第三に、終局が違います。盤双六はベアリングオフがありません。つまり自分のインナーに15個の自駒を入れた瞬間に勝ちになります。ラストロールで一方のダイスの目でベアリングインできれば、もう一方の目は使わなくて構いません。

第四に、ギャモン勝ちの意味が違います。盤双六は自駒をインナーに入れれば勝ちで、これを「入り勝ち」と言います。そのとき相手を1個以上バーに上げていて、しかもインナーをシャットアウトしていれば、これを「蒸し勝ち」または「無地勝ち」と言つて2倍の勝ちです。1個ヒットし

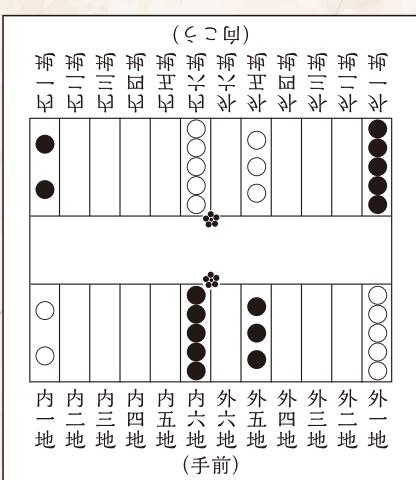
ていれば十分で、2個以上ヒットしても点は増えません。ただしインナーのプライムが、前から222333の形か、2323323の形にうまく入れて蒸せたら、これを「無上勝ち」と言って3倍の勝ちになります。これがバックギャモン勝ちに当たります。

第五に、これは言うまでもないことですが、盤双六にはダブルリングキューブはありません。当然ダブルのルールはありません。

これ以外の初期配置や、駒の進め方、ヒットなどのルールは、全く違います。

歴史の説明のところで述べたように、上記のルールが千五百年間一貫していなかったわけではありません。上記は江戸時代後半のルールで、これを「近世ルール」と私は呼んでいます。今回ここで対戦するのは近世ルールです。

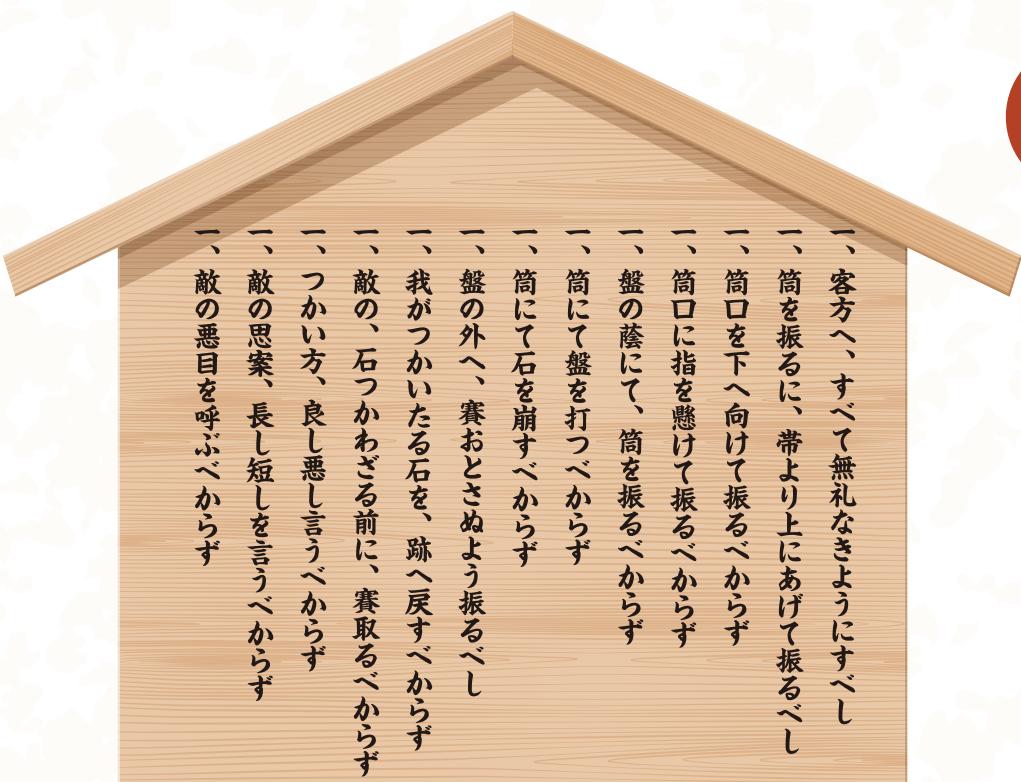
バックギャモンが今の形になつたのは二千年ぐらい前の地中海沿岸、現在の国名で言えばイタリア、ギリシア、トルコなどの辺りだらうと考えられています。その時のルールは、上記の第一と第二を入れて、ギャモン勝ちのあるルールだつたろうと想像されます。これが日本に伝わつたもので、バックギャモンの古代ルールと盤双六の古代ルールは同じものと思われます。日本に「ギャモン勝ち」のルールのあつた明確な証拠はないのですが、千百五十年南宋の洪連によつて書かれた『譜



▲盤双六の初期配置（本双六配置）
(黒手前左上がりの例)

作法

古文書には以下のように
作法が書かれています。



盤舟



呼目称の

